

ISSN 2187-0691

Japanese Journal of Maritime Activity

Vol.7 No.1

第7巻 第1号

海洋人間学雑誌

September 2018

平成30年9月

日本海洋人間学会第7回大会
大会号

日本海洋人間学会

Japan Society for Maritime Activity

目 次

日本海洋人間学会第7回大会 大会次第	1
大会役員	2
大会日程表	3
会場アクセス	4
品川キャンパス案内図	5
プログラム	6
参加者へのお願い	10
日本海洋人間学会第7回大会 抄録集	12
第7回学会大会基調講演	13
シンポジウム「船員の安全と健康」	15
シンポジウム「日本における遠泳の歴史と実践」	18
一般発表抄録	20

編集後記/29

第7回日本海洋人間学会大会

大会次第

主催：日本海洋人間学会

会期：2018年9月22日（土）・23日（日）
会場：東京海洋大学品川キャンパス 白鷹館

【大会本部】

〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7
東京海洋大学内 日本海洋人間学会事務局
TEL/FAX：03-5463-0638（藤本研）
E-mail：jsmta@jsmta.jp

第7回日本海洋人間学会大会

学会役員

会長 : 神田一郎

副会長 : 武田誠一 柳 敏晴

常務理事 : 佐野裕司

理事 : 海野義明 國枝佳明 熊田公信 久門明人 佐々木剛 千足耕一
中村夏実 藤本浩一 保坂由紀 松本秀夫 矢野吉治

監事 : 菊地俊紀 寺澤寿一

事務局長 : 藤本浩一（兼任）

大会実行委員会

実行委員長 : 武田誠一

委員 : 阿保純一 漆谷伸介 菊地俊紀 佐々木剛 佐野裕司 千足耕一
寺澤寿一 蓬郷尚代 藤本浩一

大会補助 : 東京海洋大学大学院生、学部生

大会日程表

9月22日(土)

- 10:30～11:15 次期役員会 (役員任期：2018年9月24日～2020年通常総会開催日)
- 11:15～12:00 現役員会 (役員任期：2016年9月26日～2018年9月23日)
- 12:00～ 受付開始
- 12:55 開会の辞
- 13:00～13:50 第7回学会大会基調講演「フリーダイビングと禅の交錯点」
- 14:00～15:30 学会企画シンポジウムⅠ「船員の安全と健康」
- 15:40～16:55 学会企画シンポジウムⅡ「日本における遠泳の歴史と実践」
- 17:00～17:45 口頭発表セッション1
- 18:00～20:00 懇親会(大学会館1階食堂)

9月23日(日)

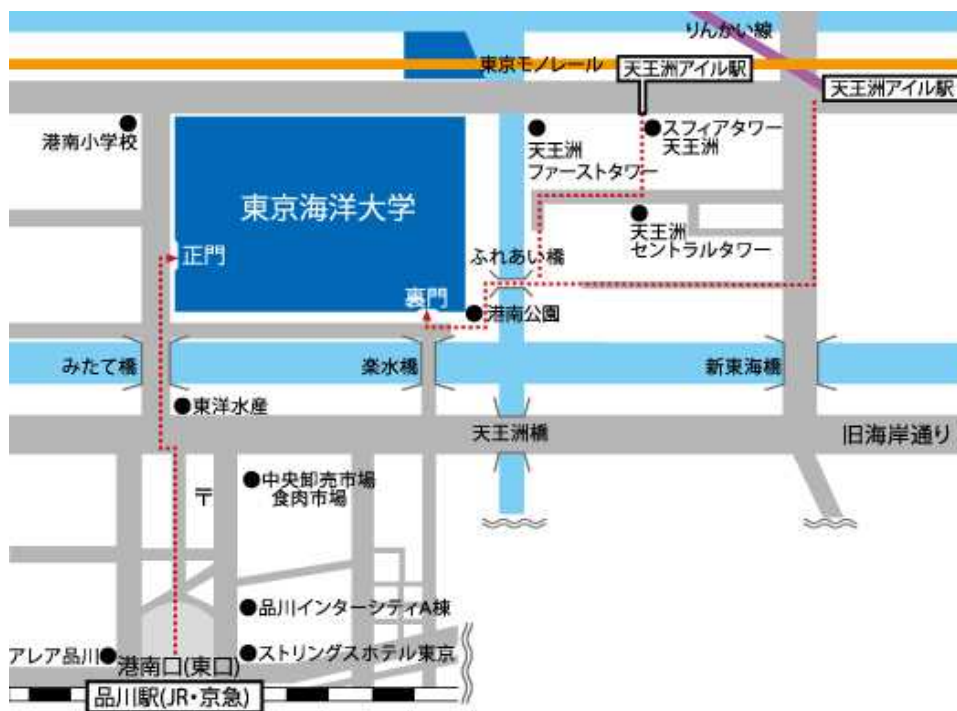
- 09:30～ 受付開始
- 10:00～11:20 口頭発表セッション2,3
- 11:20～12:00 ポスターセッション
- 12:00～13:15 昼食
- 13:15～14:00 第7回日本海洋人間学会総会
- 14:00～14:10 優秀発表賞等表彰式
- 14:10 閉会の辞

※プログラムは変更される場合があります

東京海洋大学品川キャンパスへのアクセス

会場：東京海洋大学品川キャンパス（〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7）

- 交通： 1)JR 線・京浜急行線「品川駅」下車、港南口より徒歩約 10 分
2)りんかい線「天王洲アイル駅」下車、徒歩約 15 分
3)東京モノレール「天王洲アイル駅」下車、徒歩約 10 分



品川キャンパス案内図

- ・発表・総会会場（白鷹館1階講義室：建物番号21）
- ・役員会（5号館1階実験室：建物番号27）
- ・懇親会（大学会館食堂：建物番号25）



1 守衛所	13 7号館/産学・地域連携推進機構	25 大学会館
2 保健管理センター	14 放射性同位元素利用施設	26 講義棟
3 職員集会所	15 水理模型実験棟	27 5号館
4 本部管理棟	16 廃水処理施設	28 武道館
5 講堂	17 8号館	29 体育管理・合宿施設
6 回流水槽実験棟	18 9号館	30 課外活動施設
7 1号館	19 学生寮(朋鷹寮)	31 特殊実験棟/情報処理センター
8 2号館	20 国際交流会館	32 体育館
9 飼育実験室	21 白鷹館	33 漁業機械学実験実習棟
10 3号館	22 楽水会館	34 艇庫
11 4号館	23 水産資料館	
12 6号館	24 附属図書館	

プログラム

9月22日(土)

10:30～11:15 次期役員会 (役員任期：2018年9月24日～2020年通常総会開催日)

11:15～12:00 現役員会 (役員任期：2016年9月26日～2018年9月23日)

12:00～ 受付開始

12:55 開会の辞

13:00～13:50 第7回学会大会基調講演 (無料一般公開)

「フリーダイビングと禅の交錯点」

演者：篠宮 龍三 (フリーダイビングアジア記録保持者)

司会：藤本 浩一 (東京海洋大学学術研究院)

14:00～15:30 学会企画シンポジウムⅠ「船員の安全と健康」 (無料一般公開)

司会：坂 利明 (独立行政法人 海技教育機構)

シンポジスト：鈴木 英実 (国土交通省 海事局 船員政策課 労働環境対策室長)

「第11次船員災害防止基本計画について」

神田 一郎 (船員災害防止協会 顧問)

「少子高齢化と船員災害」

森岡 丈知 (日本郵船株式会社 海務グループ航海チーム 船長)

「On Board Health」

15:40～16:55 学会企画シンポジウムⅡ「日本における遠泳の歴史と実践」 (無料一般公開)

司会：千足 耕一 (東京海洋大学学術研究院)

シンポジスト：真田 久 (筑波大学体育系)

「日本における遠泳の歴史と展開」

田平 孝行 (鹿児島市立清水小学校水泳同好会・第64回会長)

上村 宏明 (鹿児島市立清水小学校水泳同好会・副会長・同校PTA会長)

「遠泳を通じた地域との繋がり、その歴史と今後の展望」

9月22日(土)

17:00～17:45 口頭発表 セッション1

座長：久門 明人（独立行政法人 海技教育機構）

Oa01. 漁業練習船における航海実習効果に関する研究

岡 真也（東京海洋大学）

Oa02. 漁業練習船における実習の効果に関する研究
－漁業の理解に関するテキストマイニングを用いた分析－

會川 鉄太郎（東京海洋大学）

Oa03. 海洋活動におけるライフスキル獲得に関する調査研究

千足 耕一（東京海洋大学）

18:00～20:00 懇親会（大学会館食堂）

タイトルの記号は以下の通りです

Oa：口頭による研究発表

Ob：口頭による実践報告

Pa：ポスターによる研究発表

Pb：ポスターによる実践報告

9月23日(日)

09:30～ 受付開始

10:00～10:45 口頭発表 セッション2

- 座長：千足 耕一（東京海洋大学学術研究院）
- Oa04. 東京オリンピックサーフィン開催競技エリアにおける環境の調査の研究
加藤 祐也（東海大学海洋学部）
- Oa05. ウインドサーフィン・ワールドカップにおける観戦者のイベント満足度がイメージフィットと行動意図に及ぼす影響
平野 貴也（名桜大学・順天堂大学協力研究員）
- Ob01. アウトリガーカヌーによる江の島－新島間の島渡り報告
小林 俊（東海大学非常勤講師）

10:50～11:20 口頭発表 セッション3

- 座長：菊地 俊紀（日本大学生産工学部）
- Oa06. 腰部装着鉛玉重量および体格指数から見た海女の腰痛発症リスク
藤本 浩一（東京海洋大学学術研究院）
- Oa07. 海洋スポーツ愛好者のレジャー関与がライフスタイルに与えた影響
一種目の違いに着目した質的分析
松本 秀夫（東海大学）

11:20～12:00 ポスターセッション

- Pa01. スノーケリング初級者におけるフィンの硬度とフィン泳速度の関係
小泉 和史(日本体育大学)
- Pa02. スクーバ・ダイビングにおけるヒヤリ・ハット調査—スクーバ・ダイビング愛好者を対象として—
高野 修（東京海洋大学大学院）
- Pa03. 東日本大震災後のダイビングエリアの復興に関する研究
鉄 多加志（東海大学）
- Pa04. 海での競技会・イベントにおけるパトロール用 SUP の運用方法に関する検討
松本 秀夫（東海大学）
- Pa05. 日本における SUP（スタンドアップパドルボード）組織の現状と課題
二階堂萌恵（東海大学大学院）
- Pa06. サバニ復興運動としてのサバニレースの背景と経緯
蓬郷 尚代（東京海洋大学博士研究員）
- Pb01. 神津島夏季合宿 実施報告 ～帝京大学・Nゼミの活動～
永島 昇太郎（帝京大学）

タイトルの記号は以下の通りです

- Oa：口頭による研究発表
Ob：口頭による実践報告
Pa：ポスターによる研究発表
Pb：ポスターによる実践報告

9月23日(日)

12:00～13:15 昼食

13:15～14:00 第7回日本海洋人間学会総会

14:00～14:10 優秀発表賞等表彰式

14:10 閉会の辞

学会大会参加者へ

大会への参加は、下記の年会費および大会参加費を納めた本学会会員に限りです。なお、口頭もしくはポスター発表の筆頭者である学生会員の参加費は無料です。本学会会員以外の方も臨時会員として、大会当日に参加費を納めることで参加することができます。ご入会を希望される場合は、この他に入会金 1,000 円と年会費 6,000 円が必要となります。事務局口座への前納振込（期限：2018 年 8 月 31 日 金曜日）を推奨します。

	年会費	前納大会参加費	大会当日参加費
正会員	6,000円	3,000円	5,000円
学生会員	3,000円	1,000円 *	2,000円（学生証を提示）
賛助会員	一口20,000円	1,000円	2,000円（一口1名まで）
臨時会員	—	—	5,000円（大会当日受付）

* 学会発表筆頭者の学生会員は大会参加費無料

シンポジストへ

1. 発表形式は、PowerPoint を使用した液晶プロジェクターによる一面映写を原則とします。また、発表中のパソコンの操作は、発表者の責任において行って下さい。なお、発表時間は基本的に 30 分となっておりますが、司会者との打ち合わせにより調整頂いても結構です。
2. プレゼンテーション用のパソコンは原則として学会本部で準備したものを使用して下さい。パソコンのシステムは、Windows7、PowerPoint2010 となります。お手持ちのパソコンを使用される際は、ご講演前に接続確認および試写をお願い致します。学会本部で準備したパソコンを使用される場合、発表用 PowerPoint ファイルは、受付に準備されている学会所定のパソコンにコピーしたのち、必ずご自身で動作確認を行って下さい。なお、コピーは以下の日時にてお願い致します。

基調講演・シンポジウム I および II 22 日 12:00～12:50、13:50～14:00、15:30～15:40

3. 学会本部で準備したパソコンを使用される場合、PowerPoint ファイルへの動画の埋め込みは、AVI 形式、WMV 形式など、Windows7 環境下での PowerPoint2010 において再生可能であるファイル形式、なおかつ容量も極力少なくしたものをご使用ください。また当日は PowerPoint ファイルのみならず、動画ファイルの原本も合わせてお持ちください。学会本部でも動画ファイル形式や再生に関して幅広く対応できる準備を整えておりますが、万が一再生できない場合は何卒ご容赦下さい。

一般口頭発表者へ

1. 発表者は会場到着後、ご自身の発表の前までに必ず受付を済ませて下さい。
2. 発表形式は、PowerPoint を使用した液晶プロジェクターによる一面映写を原則とします。また、発表中のパソコンの操作は、発表者の責任において行って下さい。
3. 前演者が発表を開始した後に、必ず次演者席へお座り下さい。1 演題の持ち時間は、**13 分（発表 10 分、質問 3 分）**です。呼び鈴は 8 分に 1 回、10 分に 2 回、13 分に 3 回鳴ります。発表時間を厳守して下さい（持ち時間 13 分を経過した場合は、発表を打ち切って頂く場合も有ります）。
4. 発表用 PowerPoint ファイルは、受付に準備されている学会所定のパソコンにコピーしたのち、必ずご自身で動作確認を行って下さい。なお、コピーは原則として、セッション毎に定められた以下の日時にてお願い致します（パソコンが空いていれば、セッション毎に定められた時間以外でもコピー可能です）。

セッション 1	22 日	12:00～12:50、16:55～17:00
セッション 2, 3	23 日	09:30～09:55

プレゼンテーション用のパソコンは学会本部で準備したものを使用し、それ以外のパソコンは原

則として使用できないものとします。パソコンのシステムは、Windows7、PowerPoint2010 となります。

5. PowerPoint ファイルに動画を埋め込む場合は、AVI 形式、WMV 形式など、Windows7 環境下での PowerPoint2010 において再生可能であるファイル形式、なおかつ容量も極力少なくしたものをご使用ください。また当日は PowerPoint ファイルのみならず、動画ファイルの原本も合わせてお持ちください。学会本部でも動画ファイル形式や再生に関して幅広く対応できる準備を整えておりますが、万が一再生できない場合は何卒ご容赦下さい。

一般ポスター発表者へ

1. 発表者は会場到着後、指定質疑応答時間（23 日 11:20～12:00）の前までに必ず受付を済ませて下さい。
2. ポスターのサイズは、A0 版縦置き（1,189mm×841mm）の範囲内とします。
3. ポスターは、22 日 12:00 から 23 日 11:20 までに、発表者の責任において掲示して下さい。また発表者は、指定質疑応答時間中（23 日 11:20～12:00）ポスターの前にて質疑応答を行って下さい。取り外しはポスターセッション終了後から学会大会終了時までに行ってください。なお掲示場所は、学会会場 1 階の受付奥のスペースとなります。詳細は当日受付にてご確認ください。
4. 掲示用のピンまたは磁石等は学会本部にて準備しております。

宿泊施設の手配について

宿泊施設の手配は、大会事務局では行っておりませんので、個人にてご手配下さい。

昼食について

東京海洋大学品川キャンパス付近は、品川駅港南口にかけて多数の飲食店、コンビニエンスストア等がありますので、そちらをご利用下さい。

※22 日土曜日は、理事・監事および役員会出席者に弁当の用意があります。

※23 日日曜日は、理事・監事・代議員に弁当の用意があります。

懇親会（9 月 22 日 18-20 時 大学会館）にご参加の方へのお願い

懇親会費は下記のとおりとなっております。事務局口座への前納振込（2018 年 8 月 31 日まで）を推奨します。

	前納	当日
一般	3,000円	4,000円
学生	2,000円	3,000円

海洋人間学雑誌 投稿料無料のご案内

第7回学会大会にて口頭発表またはポスター発表が行われた演題につきましては、2018 年 11 月 30 日までに海洋人間学雑誌（ISSN:2187-0691）にご投稿頂きますと、通常投稿料が原著、研究資料、報告書は 1 編あたり 10,000 円、短報は 1 編あたり 5,000 円となっておりますところ、全て無料と致します。投稿規定につきましては学会 HP（<http://www.jsmta.jp>）をご参照下さい。

第7回日本海洋人間学会大会

抄録集

主催：日本海洋人間学会

会期：2018 年9月22日（土）・23日（日）

会場：東京海洋大学品川キャンパス 白鷹館

【大会本部】

〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7

東京海洋大学内 日本海洋人間学会事務局

TEL/FAX：03-5463-0638（藤本研）

E-mail：jsmta@jsmta.jp

第7回日本海洋人間学会大会・基調講演

フリーダイビングと禅の交錯点

篠宮龍三（フリーダイビングアジア記録保持者）

【略歴】

平成11年3月 法政大学工学部機械工学科 卒業
平成11年4月 水道機工株式会社入社、フリーダイビング競技を開始
平成15年12月 同社を退社し、平成16年よりプロ活動開始
平成17年～19年 国際大会3年連続総合優勝（エジプト、フランス）
世界ランキング1位入賞（2005シーズン）。
平成20年4月 アジア人初となる水深100m達成
平成22年4月 現アジア記録水深115m達成 同年7月沖縄にアジア
初開催となる世界選手権誘致、日本代表キャプテン
として銀メダル獲得。
平成28年 競技引退、同年アプネアワークス株式会社設立
現在沖縄にてフリーダイビングスクール運営。



【講演概要】

フリーダイビングは近年メディアでも取り上げられることが増え、徐々に注目されるようになってきた素潜りのスポーツである。海洋とプール合わせて8種目に区別される。この中でも、足ヒレを使用し海洋において一息で垂直に深く潜行し浮上する「コンスタント種目」がこのスポーツの花形であり、選手たちは競技人生をかけて水深100mに到達できるか切磋琢磨している。現在の世界記録は130mに達している。

このスポーツは競技でありながら、ある意味命がけのチャレンジを含むため恐怖心を和らげ、平常心で普段の力が発揮できるかという点が成否を分けるうえで非常に重要である。勝利を焦るあまり結果が出ないというケースは多く見受けられる。そのため禅やヨガなどの東洋思想を取り入れ自らのメンタルを整える選手が多数を占める。勝とうとせず無心になれるかが求められるのだ。

競技を18年、指導を17年行ってきた経験から、競技者同士、生徒同士の仲間意識や絆がこの命がけの海洋スポーツによって育まれる瞬間を何度も目撃してきた。このスポーツにおいて、競技終了後はお互いの健闘だけでなく無事であることがなによりも尊く、喜び合うべき要素なのである。フリーダイビングは東洋、西洋両方の要素を持ち、大事なのは勝敗よりも助け合いの精神のシーマンシップであると教えてくれる。海洋環境での活動を通して人間的成長を促してくれるこのスポーツの教育的価値と本質的な要素を皆さんと共有したい。

シンポジウム抄録

第11次船員災害防止基本計画について

鈴木英実（国土交通省 海事局 船員政策課 労働環境対策室長）

【略 歴】

昭和60年4月 旧運輸省 入省
平成3年4月 船員部船舶職員課 外国船舶監督係長
平成14年4月 船舶中央労働委員会 専門官
平成16年4月 海技資格課 専門官
平成23年4月 海技資格課 船員教育室 課長補佐
平成24年4月 海技教育機構 事務局長
平成25年4月 海事局安全政策課 首席運航労務監理官
平成26年4月 海事局船員政策課 労働環境対策室長



【講演概要】

船員災害防止基本計画は、昭和42年に施行された法律「船員災害防止活動の促進に関する法律」に基づき、国土交通大臣が5年毎に船員災害防止に関し、基本となるべき事項を定めたものです。また、その実施を図るため、毎年、船員災害防止実施計画を作成しなければならないとされています。

昭和42年当時は、戦争により荒廃した国土の復興のために、陸上・海上ともに懸命でした。海上においては、戦争で多くの船と熟練船員を失いましたが、かろうじて残された数少ない船による海上輸送が復活し、失われた船腹数を取り戻すために船舶の建造が急増することに伴い、船員数の確保も行われ、生産活動が活発に行われるようになりました。しかしながらその陰では陸上・海上共に多くの労働災害による犠牲者が多い状況にありました。

特に海上においては、海中転落や転倒・落下事故による死傷災害に加えて、戦争で数多く失った熟練船員不足による、海難事故なども多く、国を挙げた様々な諸対策が講じられ、「船員災害防止活動の促進に関する法律」が成立しています。

また、同年、現在の船員災害防止協会が設立され、船主団体だけでなく広範囲の船舶所有者を会員として、より強固な財政基盤をもって、活発な船員災害防止活動を推進するため、海運・水産業界を網羅する全国的規模の船舶所有者の組織化を目指すことになりました。昭和43年度から船員災害防止基本計画が5年ごとに策定され、毎年船員災害防止実施計画の下、全国規模で船員災害防止活動が行われています。

今年度は、第11次船員災害防止基本計画の初年度であり、平成34年度まで、新たに掲げられた目標の達成のため、全国の船舶所有者、船員、国及び船員災害防止協会等の関係者が一致協力して、船員災害防止を目指して取り組んでいきます。

本日は、第11次船員災害防止基本計画策定にあたって、第10次の船員災害の分析や、アンケート調査を実施して、さらなる船員災害減少目標を設定した経緯について紹介いたします。

少子高齢化と船員災害

神田一郎（船員災害防止協会 顧問）

【略歴】

神戸商船大学 商船学部 機関学科卒業
運輸省（国土交通省）航海訓練所 機関科教官
独立行政法人 航海訓練所 理事（訓練担当）
船員災害防止協会 専務理事（7月から顧問）



【講演概要】

船員を目指した若者の育った時代背景なども変化してきており、若年船員の資質なども時代と共に微妙に変化してきています。海技の伝承だけでなく安全教育などは、熟練船員が担うのが一般的ですが、特に内航船社の船員の年齢構成では、熟練船員と言われる40代の船員が不足している状況にあります。この原因は、30年前頃から外航船社が日本人船員の雇用を急に削減したこと、さらに漁船の操業区域が200海里問題で縮小されたことによる廃業が続いたため、内航船社は即戦力の船員として彼らを採用することになりました。このため、当時の新卒者の採用が外交、内航、漁船ともに手控えられたため、今では40代、50代の船員が少なく、60代以上の船員の占める割合が大きくなっています。高齢船員の比率が高いことによる死傷災害や、生活習慣病による疾病率の増につながっている原因でもあります。

また、新卒者の船員が乗船すると、直上の船員は50代、60代の場合もあり、親あるいは祖父のような年齢差のある船員が指導係になることが多く、コミュニケーションをとるのに、お互いが苦勞しているという現実もあります。

疾病報告の中で、気分障害と神経症の疾病事例が増加傾向にあります。特に20代、30代の件数が多くなっています。このことは単なる生活環境や労働環境の設備の改善で解決できる問題ではなく、船員自身の意識改革なども進める必要があります。また、60代の船員の大量退職を補うために、新人船員の確保育成の努力が国を挙げて行われていますが、海技の伝承、安全教育の重要性がますます重要となっています。船災防がこれまで培ってきた安全衛生に関する啓蒙活動の必要性が、極めて重要になってきていると考えます。

少子高齢化により、陸上産業同様に若年船員の採用が困難になってきている現実の中で、船員災害の実態を知るとともに、どのような対策を行う必要があるかを考えてみます。

大会1日目：9月22日（土曜日）14:00～15:30
シンポジウムⅠ 「船員の安全と健康」

会場：白鷹館講義室

On Board Health

森岡丈知(日本郵船株式会社 海務グループ航海チーム 船長)

【略 歴】

高知県高知市 生まれ
2000年03月東京商船大学（現東京海洋大学）卒業
2000年10月日本郵船株式会社 入社
2010年09月人事グループ海上人事チーム
2011年04月船長昇進
2013年01月NYK SHIPMANAGEMENT PTE LTD
2015年03月海務グループ航海チーム
現在に至る



【講演概要】

健康といっても身体的/精神的なふたつが存在し、そしてそれらが表裏一体の関係であることはみなさまもご承知のことと思います。

あらためて、船の上という特殊な環境を眺めて見ると、いつも水に浮いていて揺れている、陸上から遠く離れ、買物が毎日できる環境ではなく、他人と24時間一緒の空間で仕事も生活もする、そんな特殊な環境であることが挙げられます。

ところで、皆さん船に乗ったときに、デッキの上でヘルメットをかぶっていないことあったでしょうか？ またヘルメットをかぶって、ジョギングやウォーキングをする気になるでしょうか？

コックさんは1日3食、20人以上の食事を作らねばならず、また長ければ1ヶ月近く食料補給されない状況もある中、バランス取れた食事、また個人の体質・体調に合わせた食事を提供し続けることが難しいことは想像に難しくなく、自分の身は、自分で守るしかありません。

また、昨今ではSNSの普及に伴い、家族や友人と船上においても「繋がる」ことは可能になりましたが、それゆえ孤独感に苛まれるケースも見受けられます。すぐそばに、日々一緒に過ごす仲間がいるにも関わらず、抱える悩みを吐露するのは何千キロも離れた家族や友人達。もし自殺を仄めかしたとしても、それに気づけるのは、、、

上記に鑑み、最近の外航船舶における現状や取り組みを紹介したい。

シンポジウムⅡ 「日本における遠泳の歴史と実践」

日本における遠泳の歴史と展開

真田 久（筑波大学体育系）

【略 歴】

1979年筑波大学体育専門学群卒、1981年同大学院体育研究科修了。現在、筑波大学体育系教授。博士（人間科学、早稲田大学）。古代および近現代のオリンピック競技会や嘉納治五郎に関する歴史人類学的研究に従事。2010年設立のIOC公認「筑波大学オリンピック教育プラットフォーム」事務局長として、附属学校11校とともにオリンピック・パラリンピック教育の全国展開に携わる。2014年に政府事業としてスタートした”Sport for Tomorrow”の大学院学位プログラム、つくば国際スポーツアカデミー（TIAS）のアカデミー長も務める。

他の主な職務：

- ・東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 参与
- ・同組織委員会 文化・教育委員会委員、大学連携検討会委員長
- ・日本オリンピック・アカデミー副会長
- ・嘉納治五郎記念国際スポーツ研究交流センター理事
- ・日本オリンピック委員会オリンピック・ムーブメント専門部会委員
- ・文化庁文化プログラムノウハウ集作成検討委員会委員

著書：『19世紀のオリンピア競技祭』（明和出版、2012年）。共著として『Olympic Education』（Routledge, 2017）、『現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか』（ミネルヴァ書房、2014年）、など



【講演概要】

1890年以降、各流派による游泳は、海水浴の流行や日清戦争前後からの「海国日本」のスローガンにより、隅田川などの河川で盛んに行われるとともに、海浜で行う游泳実習（遠泳）へと拡大した。教育機関では学習院や第一高等学校が先駆けであるが、嘉納治五郎により始められた嘉納塾や造士会における游泳、そして高等師範学校および附属中学校における海浜での游泳実習は、教育的な視点が盛り込まれ、高等師範卒業生により国内に普及していった。なぜ嘉納は海浜での游泳を奨励したのであろうか？1899年に彼は次のように書き綴っている。

「天下多数の学生は、平素其身體の鍛錬十分ならざるものあり。我等は又諸子が適當なる方法を以て、體育の爲めに、暑中休暇を利用せんことを望む。即ち游泳の如きは唯に消暑の効あるのみならず。身體の各部を運動せしめて、其發育を資け、精神を快活にし、胆力を養成するの効甚だ大なるものあり。況や四面環海の国に生まれたる日本男児が、巨浪洪波の間に其生を完うすべき術を学ぶは、寧ろ国民として当然の務たるべきをや。其他適當なる地方を選みて旅行を爲し、平素校舎に於て学習せる所を实地に験し、以て其知識を開発するが如き、最も我等の望む所なり」

（嘉納治五郎「如何にして暑中休暇を過ごすべきか」（1899）『國士』10号、1-5頁）

このほか当時の嘉納の言説をまとめると、海浜での游泳実習の効果として次のことが考えられていたことがわかる。

- ・身体の調和的な發育発達を促す
- ・精神を快活にするとともに忍耐力や困難に立ち向かう胆力を養成する
- ・教室での学習を实地体験する
- ・共同生活を通して互いに譲り合うことなどを学ぶ

1902年より開始された東京高等師範学校における水泳実習の継続的实施は、そのまま国内における臨海実習の普及に繋がっていった。

シンポジウムⅡ 「日本における遠泳の歴史と実践」

遠泳を通じた地域との繋がり、その歴史と今後の展望

田平孝行（鹿児島市立清水小学校水泳同好会・第64回会長）

上村宏明（鹿児島市立清水小学校水泳同好会・副会長・同校PTA会長）

【略歴】

田平 孝行（タビラ タカユキ）

第62回、長女共に入会。現役コーチとなる。

第63回、副コーチ長として、指導にあたり本泳完泳

第64回、同会会長として、台風での延期などを乗り越え、児童75名、
コーチ25名。計100名 1時間34分06秒で完泳へと導く。

上村 宏明（カミムラ ヒロアキ）

第60回、長女共に入会。現役コーチとなる。

第63回、コーチ長

第64回、副会長、同校PTA会長、本泳4回完泳



【講演概要】

鹿児島市立清水小学校は、1912年（明治45年）4月2日に鹿児島市立尋常小学校として創立した、創立106周年の学校である。

1917年（大正6年）7月 初代校長が「雄大なる氣宇と不屈不撓の精神と強靱なる身体を錬成する最善の行事なり」との信念の基、第1回「錦江湾横断遠泳」を実施したが、1944年（昭和19年）、戦争の激化により中断された。

しかし、「一、子どもに氣力と体力を 一、学校に伝統の復活を 一、地域社会に活性化と連帯の輪を」を目標に、1982年（昭和57年）に創立70周年の目玉事業として復活して現在に至っている。

本事業は、保護者が主体となり、後援会（OB）・学校側・地域の方々の協力のもとに「清水小学校水泳同好会」の運営を行っている。また、遠泳を実施するにあたり水泳同好会とは別に「錦江湾横断遠泳実行委員会」を組織している。この組織は実行委員長（学校長）を筆頭に学校・水泳同好会・PTA・同窓会・地域から役員・顧問を選出し地域が一体となって取り組むようにしている。

毎年、ゴールデンウィーク明け翌日から練習を開始し、毎日の授業終了後約2時間と土日に練習を行っている。6月後半までの土日はプールでの練習となるが、6月後半からの土日は学校近くの磯海水浴場での練習を行っている。本横断遠泳に参加するためには、泳者判定基準があり、プール・海で検定を行い、それをクリアすることで、遠泳に挑戦する資格が与えられる。

プール検定は、練習開始2週間後から毎週行なわれ、まず1000m足をつかずに泳ぎきれるか、最終的には3000mを1時間30分以内に泳ぎきる必要がある。海検定は、泳ぐスピードにアップダウンを付けたり、わざと潮にぶつけて泳がせ、隊列から遅れなければ合格となる。このように本番よりも過酷な条件を設定し、ある程度本番中の自然環境の変化にも対応できる検定基準を設けている。

遠泳開催日は、7月後半から8月前半で潮が小潮の日で、入水時間もその日の満潮の1時間前に設定する。理由は小潮が潮の流れが小さく、さらに満潮前後の潮どまりの時間が最も条件が良いからである。それでも過去には潮に流され2時間を超える時間を要したこともあった。毎年、海の条件が異なるために、本番2週間前と前日に指導者による試泳を行い、潮の流れを確認し本番当日のコース取りの参考にしている。

1982年（昭和57年）の復活第1回から今年度までの37年間に3311人挑戦し、3311人全員完泳の偉業を成し遂げている。

一般発表抄録

タイトルの記号は以下の通りです

- Oa：口頭による研究発表
- Ob：口頭による実践報告
- Pa：ポスターによる研究発表
- Pb：ポスターによる実践報告

22日・セッション1

発表時間 17:00~17:15

Oa01. 漁業練習船における航海実習効果に関する研究
岡真也・會川鉄太郎・坂本寛子・林敏史（東京海洋大学）、蓬郷尚代（東京海洋大学博士研究員）

キーワード：天文航法、テキストマイニング、航海訓練

【目的】

練習船での航海実習は、陸上の教室で学習した理論をもとに、船舶運航上での技能の習得として、多種の実習が行われている。本研究は、実習の効果を検討するための基礎研究として、遠洋航海での乗船実習の何が学生にとって重要と意識されたかを明らかにするために、実習生が航海実習期間中に記した自由記述を収集・分析し、意味のある語彙を可視化することを目的とした。

【方法】

東京海洋大学漁業練習船神鷹丸（しんようまる）で行われている乗船漁業実習Ⅳ（3か月）の内、2018年2月1日東京出港から2月19日那覇入港までの間、4年次学生23名（うち女性9名）を対象とし、航海実習として天文航法を実施した。

実習生は「航海」について、1) 理解したこと 2) 達成度 3) 感想 に分けて実習中、毎日記録を行った。テキスト分析には IBM SPSS Text Analytics for Surveys を用いた。対象は4年次実習生23名、3ヶ月の乗船実習のうち東京出港から那覇入港までの19日間の記録の「航海について理解したこと」のうち無回答を除く、385件のデータを分析対象とした。

【結果と考察】

今回の実習期間中に記した自由記述のうち「航海について理解したこと」の項目の分析を行った結果、「天文航法」の単語出現頻度が高かった。また、これらの単語に共通する回答として、「計算」と「作業」にかかわる記述が多く認められた。

実習内容から操船実習、航海計器や気象通報が重点的に行われたが、繰り返し段階的に実習を行った「天文航法」において、記述頻度が多く反映される結果となった。

実習での教育として、様々な項目があるが、教育効果を有効とするためには、単発ではなく、繰り返し段階的な実習が、更に教育効果を高めることができる可能性を自由記述からの分析で確認できた。

22日・セッション1

発表時間 17:15~17:30

Oa02. 漁業練習船における実習の効果に関する研究—
漁業の理解に関するテキストマイニングを用いた分析—

會川鉄太郎・岡真也・坂本寛子・林敏史（東京海洋大学）、蓬郷尚代（東京海洋大学博士研究員）

キーワード：漁業実習、効果、テキストマイニング

【目的】

漁業練習船における実習は、漁船漁業での漁労における知識及び技能の習得のみならず、リーダーシップやリソースマネジメントなど人間形成に必要な社会性の育成に効果があるといわれている。本研究は、実習の効果を検討するための基礎研究として、漁業実習教育の何が学生にとって重要と意識されたかを明らかにするために、実習生が操業実習期間中に記した自由記述を収集・分析し、意味のある語彙を可視化することを目的とした。

【方法】

東京海洋大学漁業練習船神鷹丸（しんようまる）で行なっている実習期間3か月の乗船漁業実習Ⅳのうち、2018年2月1日東京出港から2月19日那覇入港までの19日間に実施した、冬季太平洋でのマグロはえ縄操業期間において実習生の日誌を分析の対象とした。

実習生は、4年次学生23名（うち女性9名）であり、実習生は毎日の日誌の中で「漁業」「航海」「船内生活」について自由記述形式で記録をおこなった。本研究では「漁業について理解したこと」のうち無回答を除く385件のデータを分析対象とした。テキスト分析には IBM SPSS Text Analytics for Surveys を用いた。

【結果と考察】

操業期間中に記した自由記述のうち「漁業について理解したこと」に関する自由記述を分析した結果、「延縄」「マグロ」「操業」「漁」「投縄」の順に単語出現頻度が高かった。また、これらの単語に共通する回答として、「準備」に関わる記述が多く認められた。実習期間中においても、実際の操業以外に漁撈機器確認運転や枝縄作り、餌出しなど、操業を行うための準備作業に多くの時間を割いており、それが反映される結果であった。乗船漁業実習の操業期間において、実習生は漁撈における知識や技術の習得だけではなく、操業するための準備の重要性を理解していることが示唆された。

22日・セッション1

発表時間 17:30~17:45

Oa03. 海洋活動におけるライフスキル獲得に関する調査研究

千足耕一（東京海洋大学）、蓬郷尚代（東京海洋大学博士研究員）、松本秀夫（東海大学）

キーワード：海洋活動、ライフスキル、質問紙調査

【目的】

世界保健機関は、「ライフスキル」について「日常の様々な問題や要求に対し、より建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」と定義し、意思決定能力、問題解決能力、創造的思考、批判的思考、効果的なコミュニケーション能力、対人関係の構築と維持能力、自己認識、共感する能力、感情を制御する能力、緊張とストレスに対処する能力があるとしている。本研究では、海での活動に含まれる体験が参加者のライフスキルの獲得にどう影響するかといった枠組みを提示することを目的とする。

【方法】

海洋活動の専門家100名を対象として、「海での活動がライフスキル向上に影響を及ぼすか」を問う質問紙調査を実施し、回収した有効回答53通を分析対象とした。

【結果】

有効回答を得られた海洋活動の専門家53名の平均年齢は51.91（±9.83）歳、指導・活動歴は平均23.94（±9.9）年であった。海での活動が影響を及ぼすと回答があったライフスキルは「創造的思考（49件）」であり、次いで「意思決定能力（48件）」、「対人関係の構築と維持能力（47件）」が多かった。影響を及ぼさないと回答があったものは「ストレスへの対処（2件）」が最も多く、わからないと回答があったものは「共感性（15件）」「批判的思考（13件）」であった。

創造的思考については、海での活動中におけるトラブルやアクシデントを、今あるものでどのように回避するか、またはどのような工夫をするかといった、知恵を使うような経験をすることが関連すると述べられていた。また、意志決定能力については、海での活動においては、気象海象の変化に対応して行動することが求められ、特に海上での意思決定には時間がかかけられない状況があり、優先順位を常に判断する必要があるといったことが関連すると述べられていた。

謝辞 本研究はJSPS科研費（課題番号15K01516）の助成を受けたものです。

23日・セッション2

発表時間 10:00~10:15

Oa04. 東京オリンピックサーフィン開催競技エリアにおける環境の調査の研究

加藤祐也・合志明倫（東海大学海洋学部）

キーワード：サーフィン、東京オリンピック、志田下海岸、環境の変化

【目的】

本研究の目的は東京オリンピックサーフィン競技エリアにどのような環境の変化があるかを調査し、それに伴いどのような環境の変化があるかを明らかにすることを目的とする。

【方法】

志田下海岸近隣の老舗サーフショップTEDSURFのオーナー阿出川潤氏に約55分間のヒヤリング調査を行った。質問内容は以下の2項目である。①志田下海岸がオリンピックの会場になるまでの地域の方の取り組みと、東京オリンピックに対する地域の方の考え。②ここ二年間の東京オリンピックサーフィン競技開催エリアの環境の変化について。調査の結果に基に競技エリアの環境の変化を考察。

【結果と考察】

志田下海岸が東京オリンピックのサーフィン競技開催地となる要因の一つに、町会議員でサーファーの鶴沢氏を中心に地元のサーファーの協力があつたことが分かった。競技開催エリアの公共施設の環境の変化がみられたのは、志田下海岸近隣の一ノ宮海岸であった。志田下海岸ではヘッドランドの開発や近隣の上総一ノ宮駅の開発が進められている。海岸近隣に多くのマンションやアパートが建設され開発が行われている一方でそれに対する地元の方の受け入れる姿勢が整っていないということが分かった。

開催エリアでは多くの開発が進められ環境の変化が見られるが、行政と地元の方が互いに話し合い必要な開発と不必要な開発を仕分ける必要がある。互いに譲歩し合い必要な開発を行った場合、東京オリンピック効果が得られ閉鎖的な空間を取り除いたサーフタウンへの発展が考えられる。

【結論】

開催前でも開催地域の公共施設や海岸の開発等による環境の変化が見られる。しかし行政と地元の方との良好な関係を築いた上での開発が行われていない。今後開発等による開催エリアの環境の変化を行政や地元のサーファーにアンケート、ヒヤリング等で調査しそれに伴う影響を明らかにする。

23日・セッション2

発表時間 10:15~10:30

Oa05. ウインドサーフィン・ワールドカップにおける
観戦者のイベント満足度がイメージフィットと
行動意図に及ぼす影響

平野貴也(名桜大学・順天堂大学協力研究員)、岡安 功
(広島経済大学)、合志明倫(東海大学)

キーワード: イメージフィット、イベント満足度、行
動意図

【目的】

本研究は、神奈川県横須賀市で開催されたウインド
サーフィン・ワールドカップ観戦者のイベント満足度
とイメージフィットおよび行動意図の関連性について
明らかにすることを目的とする。

【方法】

2018年5月10日から12日に「Fly!ANA ウインド
サーフィン・ワールドカップ横須賀大会」に会場した
観戦者を調査対象とし、自己記入式の調査用紙を4名
の調査員が直接配布し、その場で直接回収した。配布
数は560、回収数は531、有効回答数は477部(89.8%)
であった。調査内容は属性、観戦行動、観戦動機、観
戦満足度、イメージフィット、行動意図であった。な
おイベント満足度はJames et al., (2015) 及び2017
年の同大会による調査を踏まえて作成された「理解促
進」「運営進行」「会場利便」「会場快適」の4因子12
項目(6段階リッカート尺度)を用い、SPSS25.0 およ
びAMOS25.0 によって分析を行った。

【結果と考察】

対象者は男性50.1%、女性49.9%であり、平均年齢
は48.8歳であった。神奈川県内在住者が83%、開催地
である横須賀市内在住者が45.5%であった。観戦者の
約1/3(31%)は継続的なウインドサーフィンの実施
者であった。

イベント満足度について確認的因子分析を行った結
果、適合度指標が基準を満たしていた。仮説モデルの
検証を行った結果、イベント満足度はイメージフィッ
ト($\beta=.47, p<.01$) 及び行動意図($\beta=.28, p<.01$) に
影響を及ぼしていることが明らかとなった。またイベ
ント満足度の高まりはイメージフィットを高める要因
になることが示唆され、ウインドサーフィン・ワール
ドカップの満足度は観戦者と開催地とのつながりを強
めていると推察された。なおイベント満足度の各因子
および行動意図においてはウインドサーフィンの実施
経験によって有意な差が見られた。

付記: 本研究は、名桜大学総合研究所学際的共同プロ
ジェクトの助成を受けた研究結果の一部である。

23日・セッション2

発表時間 10:30~10:45

Ob01. アウトリガーカヌーによる江の島—新島間の島
渡り報告

小林 俊(東海大学非常勤講師)、川邊保孝・松本秀夫
(東海大学体育学部)

キーワード: アウトリガーカヌー、海洋教育、島渡り

【はじめに】

アウトリガーカヌーは、太平洋ポリネシアの文化圏
を中心に人々の生活の中で島を渡る移動手段として、
欠かせない乗り物であった。現在、アウトリガーカヌ
ーの発祥であるハワイやタヒチなどでは、島から島へ
と渡る海峡横断型のレースやイベントが盛んに行われ
ている。また、IVF(国際アウトリガーカヌー連盟)
の主催するレースは、26ヶ国が参加し、海洋スポーツ
として急速に普及が行われ、将来、アウトリガーカヌ
ーをオリンピック種目にという動きも存在してる。

一般社団法人湘南アウトリガーカヌークラブは、
2007年よりクラブ活動の一貫として、島渡りをトレ
ニング・イベントとして継続的に行ってきた。それ以
前も、油壺までなどのショートトリップや、通常より
長い距離を漕ぐ宿泊イベントを開催していた。伊豆七
島への横断イベントとしては、伊豆大島への島渡りを、
過去7回、江の島—伊豆大島間において実施している。

現状、日本において、アウトリガーカヌーによる島
を渡るレースは実施されていないが、近年、湘南のエ
リアを中心に伊豆諸島へのアウトリガーカヌーによる
横断が行われている。このような経緯から江の島から
南方約110kmに位置する東京都新島村への島渡りに
ついての実践を報告することを目的とした。

【方法】

島渡りは、2018年8月に実施した。参加したメンバ
ーを途中で入れ替えるリレー方式で行い、1日目はメン
バー19名にて約8時間、2日目はメンバー23名によ
って約8時間漕いだ。

【結果および考察】

江の島出発から大島を経由して、当初の予定通り2
日目に新島に到達した。参加者23名が約16時間を費
やしてパドリングし総漕距離は140kmであった。過去
には海外のレースでしか経験することのできなかった
海況を日本でも肌で感じる事が可能であった。本実
践報告は、天候や海流の影響などに大きく左右される
カヌーでの島渡りであるが、比較の対象と感想などを
含め報告する。

23日・セッション3

発表時間 10:50~11:05

Oa06. 腰部装着鉛玉重量および体格指数から見た海女の腰痛発症リスク

藤本浩一・千足耕一（東京海洋大学学術研究院）、
山川 紘（東京海洋大学）

キーワード：海女、腰痛、錘、BMI、相対リスク

【目的】

これまで、我々は海女における腰痛の有訴者率が高い要因として、腰部に装着する鉛玉の影響を示唆した。しかし、「何キロ以上装着すると発症リスクが有意に高くなるのか」等の明確なエビデンスを未だ持ち合わせていない。そこで本研究では、海女の腰痛発症に関する鉛玉重量および体格指数（BMI）から見た発症リスク（相対リスク）の検討を行うことを目的とした。

【方法】

調査対象者は、2016年11月4、5日に開催された第7回海女サミットに参加した海女59名、2017年5月13日に開催された平成29年度里海を守る海女の会に参加した海女27名の計86名であった。このうち腰痛の有無、鉛玉重量、身長および体重のデータが揃っている62名を対象とし、相対リスクの解析を行った。

【結果】

鉛玉重量の平均値 $\pm$ SDが 6.1 ± 2.2 kgであったことから、順序カテゴリの境界値を3.9kg（平均値-1SD）未満と以上、6.1kg未満と以上、および8.3kg（平均値+1SD）未満と以上の3パターンを設定し、腰痛発症の相対リスクを解析した。3.9kg以上は未満と比較して、相対リスクは1.16倍、6.1kg以上は未満と比較して1.02倍であったが、ともに有意ではなかった。8.3kg以上は、未満と比較して相対リスクが1.32倍となり、有意であった。

BMI（平均値 $\pm$ SD： 23.5 ± 3.8 ）についても、上記同様の手法にて解析を行ったところ、19.7以上は未満と比較して相対リスクは1.29倍、23.5以上は未満と比較して1.11倍であったが、いずれも有意ではなかった。一方、27.3以上は未満と比較して相対リスクが1.35倍となり、有意であった。

【結論】

海女の腰痛について、本研究の結果から腰部装着鉛玉重量が8.3kg以上、BMIが27.3以上になると発症リスクが有意に高まることが明らかとなった。

謝辞 本研究はJSPS科研費JP16K01754の助成を受けたものです。

23日・セッション3

発表時間 11:05~11:20

Oa07. 海洋スポーツ愛好者のレジャー関与がライフスタイルに与えた影響—種目の違いに着目した質的分析—

松本秀夫・小林俊（東海大学）、蓬郷尚代・千足耕一（東京海洋大学）

キーワード：ライフスタイル、ダイビング、カヌー

【目的】

発表者らは、昨年、レジャー関与とライフスタイルの関係について、質的調査からその特徴を示した。これまでの一連の調査結果から、長期に継続している海洋スポーツ種目によって、レジャー関与の仕方やライフスタイルが異なることが考えられる。本研究は、種目によって、レジャー関与がライフスタイルに与えた影響の違いを明らかにすることを目的とした。

【方法】

2014年~2018年に、スクーバダイビング（以下SD:28名）、アウトリガーカヌー（以下OC:14名）を長期に継続している42名を対象に半構造化面接を行った。テキストデータから、仕事、居住地、レジャー関与（志向の変化など）に着目して比較検討を行った。

【結果と考察】

仕事への影響は、SDを仕事にした場合のみ、SD愛好者が仕事を変えていた。しかし、他の愛好者は、長期継続はしているが、SDを行うために仕事を変えするというライフスタイル変容は見られなかった。しかし、OCにおいては、長期的な継続から、OCへの関与が高まり、仕事そのものや、勤務形態や時間を変更するなどのライフスタイル変容が行われていた。居住地においては、SBを行うために居住地を変えることはなかった。しかし、OCでは、海辺に居住地を変えることが認められた。レジャー関与について、SDでは、志向の変化（写真志向、技術志向など）が認められたが、OCにおいては、パドリングを楽しむというスタイルで志向の変化は認められなかった。

【結論】

種目（SD・OC）によって、レジャー関与がライフスタイル（仕事・居住地）に与えた影響とレジャー関与における志向の変化の有無は異なることが示唆された。今後は、他の海洋スポーツ種目の特徴を明らかにすることが課題である。

謝辞 本研究はJSPS科研費（課題番号17K01642）の助成を受けたものです。

23日・ポスターセッション

発表時間 11:20~12:00

**Pa01. スノーケリング初級者におけるフィンの硬度と
フィン泳速度の関係**

小泉和史(日本体育大学)、松本秀夫(東海大学)、蓬郷尚代(東京海洋大学博士研究員)、高野 修(筑波大学)・千足耕一(東京海洋大学)

キーワード: スノーケリング、フィンの選択

【目的】

本研究では、スノーケリングにおけるフィンの硬度とフィン泳速度の関係について、膝伸展筋力を含めて検討することにより、フィンを選択する際の基準となるフィンの硬度について基礎的な資料を収集することを目的とする。

【方法】

協力者は、2016年及び2017年に行われたN大学マリンスポーツ実習参加者224名(男性139名、女性85名)であった。技能レベルは、N指導団体初級レベルのスノーケリングプログラムの技能テストをクリアした者であった。協力者には、マスク、スノーケル、スノーケリングジャケット、フィンの4点を装着させた。フィンの硬度は、JIS規格のK6253Aを基準として柔らかい順にA75、A80、A85の3種類を用いた。泳法は単独泳としてフラッターキック(以下FKと略記)及び曳行としてフラッターキックを使用するアンダー・アーム・プッシュ(以下UAPと略記)とした。測定種目は、泳法と距離を組み合わせたFKにおいて25M、100MとUAPにおいて25Mとした。タイム計測に際しては、水面水平方向25M及び100Mフィン泳を最大努力で2回行わせ、速い方のタイムを分析対象とした。膝伸展筋力の測定には片脚用筋力測定台を使用し、等尺性膝伸展筋力を測定した。また、左右の平均値を分析対象とし、測定値によって上位群、中位群、下位群の3グループに分けた。統計処理は、性別、膝伸展筋力グループ、種目とゴム硬度におけるフィン泳速度について、多元配置分散分析を実施した。有意水準は5%とした。

【結果と考察】

多元配置分散分析の結果、有意な交互作用が認められなかったため、主効果の検定を行ったところ、各要因すべてにおいて有意な主効果が認められた。それらを総合的に判断すると、スノーケリング初級者におけるフィンの硬度は性別、膝伸展筋力の高低、泳法や泳距離に関わらず、フィン泳速度が高いゴム硬度A75を選択することが望ましいと示唆された。

23日・ポスターセッション

発表時間 11:20~12:00

**Pa02. スクーバ・ダイビングにおけるヒヤリ・ハット
調査 — スクーバ・ダイビング愛好者を対象とし
て —**

高野 修(東京海洋大学大学院)、小泉和史(日本体育大学)、蓬郷尚代(東京海洋大学博士研究員)、千足耕一(東京海洋大学学術研究院)

キーワード: スクーバ・ダイビング、ヒヤリ・ハット、愛好者、ダイバー

【目的】

海上保安庁が発表しているスクーバ・ダイビング活動中における事故者数の推移をみると、平成元年から平成29年の間、減少傾向にないことがわかる。また、過去5年間の事故原因別事故者数の割合では、知識・技能不足が42%と最も多く、次いで実施中の活動に対する不注意が25%、健康状態に対する不注意が16%となっており、自己の過失によるものが主な原因であるとされている。

本研究では、事故に繋がる可能性のある問題点を抽出し、事故防止策を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

【方法】

第19回安全潜水を考える会(2017.11.18)、第19回潜水医学講座小田原セミナー(2018.2.3)、平成30年度日本スポーツ協会公認スクーバ・ダイビング指導者更新研修会(4/1北海道、4/7東京、4/14大阪、4/15名古屋、4/20福岡、4/22沖縄)参加の愛好者218名を対象者としてスクーバ・ダイビングにおけるヒヤリ・ハットに関する質問紙調査を実施した。

【結果】

活動中に1回以上ヒヤリ・ハット経験のある愛好者は64.8%であった。ヒヤリ・ハット経験時の活動内容においては、ガイド付きファンダイビングに参加中が53.9%と最も多かった。活動中におけるヒヤリ・ハットの要因は、器材操作の未習熟による急浮上などの知識・技能不足(38.6%)、水中ではぐれるなどの活動に対する不注意(26.7%)が多く、海上保安庁が発表している事故の原因と一致することが把握できた。

【結論】

調査結果から、器材の操作方法などの知識・技術を習熟させることや、はぐれないためにバディシステムを遵守することが、ヒヤリ・ハットを減少させるために重要であることが示唆された。

23日・ポスターセッション

発表時間 11:20~12:00

Pa03. 東日本大震災後のダイビングエリアの復興に関する研究

鉄多加志・大津克哉・川邊保孝・松本秀夫（東海大学）
キーワード：東日本大震災、漁業支援、レジャーダイビング

【目的】

発表者らは、2012年から、東日本大震災後の三陸沿岸部を中心としたダイビングエリアの復興について、漁業者とダイビング事業者の関係を中心に調査を行ってきた。大震災前には、海域利用に関して、漁業とレジャーの立場の違いから、友好的な関係を構築することが難しかった。しかし、自治体による漁業支援と瓦礫撤去などの活動を通じて、漁業者とダイビング事業者の関係が好転した。

本研究は、ダイビングエリアの復興に関して、漁業者とダイビング事業者の関係を中心に、その経過と現状から考察を行うことを目的とした。

【方法】

2012年、2014年、2018年に、三陸ボランティアダイバーズ、石巻海さくら、石巻の潜水調査会社、漁業者に聞き取りを行った。また、ボランティア活動に参加して、海中の瓦礫撤去、新たに開放されたダイビングポイントの調査を行い、大震災後7年が経過した海中の状況を比較した。

【結果と考察】

2012年当時は、港や河川などの陸に隣接したエリアにおいて、ダイバーによる、緊急な瓦礫撤去が行われていた。これまでの漁業者やダイバーの隔たりよりも、地域の必要性の中から自然に活動が開始されていた。翌2013年になると、その間に築かれた信頼関係に基づき、今後の協調を検討しながら最良の方法を模索していた。その後、漁業者との協調から、新たなダイビングポイントの開放や、新規ダイビングショップの開設、漁業者の船舶利用が推進されていた。2018年の調査では、国・自治体による必要最低限の漁業支援活動が終了し、ボランティアダイビングは縮小していた。しかし、漁業者の協力によって実現した「観光ダイビング」は定着しつつある。また、ボランティアの活動は、その活動が教育機関において講演するなどして、活動を風化させることなく啓蒙が行われている。

【結論】

三陸沿岸部を中心としたダイビングエリアの復興は、漁業者とダイビング事業者の関係が良好になり、新たな発展を遂げていた。今後、更なる発展が期待される。

謝辞 本研究はJSPS科研費（課題番号24500710）の助成を受けたものです。

23日・ポスターセッション

発表時間 11:20~12:00

Pa04. 海での競技会・イベントにおけるパトロール用SUPの運用方法に関する検討

松本秀夫・大越正大・小林俊（東海大学）、篠原秀和・小林俊樹（東海大学湘南校舎LSCクレスト）
キーワード：パトロール、SUP、海での競技会

【目的】

昨年、発表者らは、レスキュー用SUPを用いた監視・救助法に関して考察を行なった。そして、SUPがパトロール（監視）に非常に有効であることを明らかにした。現在、オープンウォータースイミング（以下OWS）・トライアスロンなどの競技会、海洋スポーツの講習会が海や河川を利用して行われている。その中で、日本水泳連盟は、競技会における事故の重大性を認識し、2010年に安全対策ガイドラインを策定している。そして、ライフセーバーは安全管理を担っている。現在、海での競技会において、SUPを安全管理に使用している事例があるが、その運用方法に関する検討は十分にされていない。本研究では、海での競技会におけるパトロール用SUPの効果的な運用に関する検討を行うことを目的とした。

【方法】

OWS安全ガイドライン・競技規則、トライアスロン競技規則、および全国で行われている競技会のHP、事故の事例報告などから安全対策の現状について情報収集を行い、パトロール用SUPの運用に関して、レスキューボード（RB）、水上バイク（PWC）等の連携などを含めた競技会の監視と救助についての方策を検討した。

【結果と考察】

OWS安全ガイドラインには、大会のレベルに応じて競技中の選手20名に対して1名以上のライフセーバーを配置が望ましいとある。また、監視救助器材には、RB、PWS、IRB（ゴムボート）などが記載されていることから、より競技者に接近できるSUP・RBと動力艇との連携が重要である。一度に多数の人間が泳ぐスイムにおいて、要救助者の発見には高い視線から監視ができるSUPは極めて有効な器材であり、事故事例にある「気がついたら浮いていた」により効果的であると考えられる。

【結論】

競技者をより高い位置から広範囲で視認できるパトロール用SUPは非常に有効であり、動力艇との連携により監視・救助を効果的に行うことが可能である。

23日・ポスターセッション

発表時間 11:20~12:00

Pa05. 日本における SUP（スタンドアップパドルボード）組織の現状と課題

二階堂萌恵（東海大学大学院）、合志明倫・松本秀夫・萩裕美子（東海大学）

キーワード：マリンスポーツ、SUP、組織

【目的】

現在、日本で急速に普及している SUP は、国内に多くの協会等の組織が設立され、競技会や講習会などが行われている。しかし、組織数や関係性は明らかにされていない。そこで本研究は、SUP の関連組織の実態を調査し、現状と課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】

インターネットの Web サイトに掲載されている協会等の HP（2018 年 8 月現在）から、目的、事業内容等を調べ、組織の特徴を分析し考察を行った。

【結果と考察】

調査の結果から、SUP の関連組織は、27 団体であった。全国規模の組織は 8 団体、地域レベルで活動している組織が 15 団体、クラブとして運営している組織が 4 団体であった。SUP における先駆けの組織としては SUPA（日本スタンドアップパドルボード協会）があり、国内の大会運営、および指導員養成まで幅広く活動していた。また、PSA-J（日本 SUP 推進協議会）は、競技会運営、およびプロ認定を行っていた。他には、振興目的の JSO（日本 SUP 振興会）、競技者支援をする JSAA（日本 SUP 選手会）、指導員養成の SIJ（日本 SUP 指導者協会）、学生競技会運営の SSLJ（日本学生 SUP 連盟）、SUP 上でヨガを行う日本サップヨガ協会、川で SUP を行う日本リバー SUP 協会が存在した。ヨガは、他のマリンスポーツ関連組織にはない分野であり心身の健康を目的としていた。SUP フィッシングや動力を取り付けた SUP ジェットが存在し、新たな組織の設立が予想される。これらの結果から SUP 関連組織は、競技系とその他に分けることができた。また、目的も様々で幅広いことが明らかとなった。

【結論】

SUP 関連組織は、急速な普及とともに、それぞれの立場から独立した団体が設立されている。今後、SUP が健全な普及・発展を行うには、各組織の特徴や活動を尊重しながら、連携できる関係性が求められると思われる。

23日・ポスターセッション

発表時間 11:20~12:00

Pa06. サバニ復興運動としてのサバニレースの背景と経緯

蓬郷尚代（東京海洋大学博士研究員）、千足耕一（東京海洋大学）

キーワード：海洋文化、サバニ、聞き取り調査

【目的】

サバニとは、沖縄地方で使用されてきた民族的な小舟のことであり、戦前より漁撈や移動、運搬に用いられてきたものである。2006 年に記録されている「サバニの伝統と未来」と題されたシンポジウムにおいては、当時の沖縄本島で 423 隻のサバニをカウントできたが、シンプルな無動力のサバニは 21 隻であり、そのうち使用に耐える状態のサバニは 12 隻しかなく、サバニに関する伝統的な技術や信仰について調査記録すべきであると指摘されている。一方、2000 年に沖縄サミットを記念して開始されたサバニ帆漕レースは「古来より受け継がれてきたサバニによる操船技術の復活、帆走の再現を目指し、次の世代へと伝えていく」という思いを具現化しようとしたものであり、サバニの伝統を復興させる運動の一つとして位置づけられる。本研究では、沖縄県において取り組まれている帆かけサバニ復興運動としてのサバニ帆漕レースについて、その背景、経緯を明らかにすることを目的とする。

【方法】

サバニ復興運動のひとつである「サバニ帆漕レース」を主催する、サバニレース実行委員会の 2 名を対象として聞き取り調査を実施するとともに、これまでのレース参加艇数などについて整理した。

【結果】

与那国島で使用されていたサバニに乗りカジキ漁を取材したこと、フランスでクラシックヨットなど古いものを大切にする文化を目にしたこと、その後に沖縄のヨット関係者をはじめとする重要な人物たちに帆かけサバニ復興について相談をしたことなどがこの復興運動のきっかけとなっていたことが把握できた。レース実施場所については、琉球王朝時代の歴史的な航路でもある那覇と進貢船が立ち寄っていた座間味との間が風向きからも適しているため、当時の座間味村の議員や村長に相談したとのことであった。レースにすることで操船技術の伝承や船大工の活躍も見られるようになった。

謝辞 本研究は JSPS 科研費（課題番号 18K10922）の助成を受けたものです。

23日・ポスターセッション

発表時間 11:20～12:00

Pb01. 神津島夏季合宿 実施報告 ～帝京大学・Nゼミの活動～

永島昇太郎（帝京大学）

キーワード：実践的実習体験、総合的な学習活動

【演習科目の開講】

帝京大学医療技術学部スポーツ医療学科では2016年度より必修教科として演習科目（ゼミ）が開講された。

ゼミの主題材については、それぞれの担当教員の専門性によって運営がなされており、Nゼミでは「教職・指導実践」を主題材とし、以下の内容を今までに実施してきた。

- 種目特性からみたスポーツプログラムの調査
- 運動者に応じたスポーツプログラムの作成
- スポーツプログラムの企画・運営
- スポーツ種目の講習会受講
 - スノーケル・リーダー講習
 - フライングディスク・アドバイザー講習
 - キッズアスレティックス指導者講習

【神津島夏季合宿について】

神津島夏季合宿（4泊5日）は、上記演習科目における実践的実習経験として位置づけ、本演習科目受講生にとっての総合的な学習活動の機会として取り組んでいるものである。

なお、夏季合宿の主たる内容は、野外活動（登山ハイキング、キャンプ、体験ダイビング、スノーケリングなど）と、体験活動（船上泊、島内の中学・高校生へのスポーツ指導、スポーツ交流の取り組みなど）であり、これらを実施するための事前の企画・準備や、実際の運営・実施についても、学生の活動体験として取り組むようにしている。

【本取り組みの成果】

この合宿のための様々な取り組みについては、参加学生の感想などを集約しており、その内容から学生生活に取り組む姿勢の変容（遅刻・欠席の減少、友人・交流関係の拡張、進路選択の熟考など）が見られ、一定の教育効果があることがうかがえる。

*2018年度の神津島夏季合宿の実施については、帝京大学高等教育開発センターの「SoTL助成プログラム」の支援を受けて実施された。

編集後記

以前、当編集後記において、女性海技士を主人公とした「マジで航海してます」というテレビドラマについて紹介がありましたが、この夏、同番組の「～Second Season～」が放送されました。

航海士や機関士を主人公としたドラマ自体大変珍しいものですが、その主人公が女性ということにも注目しています。従来から船の運航は男性中心の仕事で、ロープの固縛や荷役など身体的負担の大きい作業が多いとのイメージが定着していることもあり、業界の女性人口はまだまだ低い状況にありますが、海事産業における女性の活躍を応援する「輝け！フネージョ★」という国のプロジェクトも推進されている昨今、女性のみなさんが輝く海の現場になればと期待しています。

さて、海洋人間学会雑誌第7巻第1号をお届けします。本号では、第7回大会の基調講演及びシンポジウム並びに一般発表の抄録を収めております。

本大会の基調講演では、「フリーダイビングと禅の交錯点」という斬新な観点からのテーマ、シンポジウムにおいては、「船員の安全と健康」及び「日本における遠泳の歴史と実践」という豊富な経験、知見からのテーマが設けられ、それぞれの先生方から貴重なお話をお伺いします。

本大会も、ご参加の皆様方の闊達なご議論に期待したいと思います。

(漆谷伸介)

日本海洋人間学会編集委員会

委員長／松本秀夫

編集委員／漆谷伸介、小川涼、佐藤淑子、若林庸夫

日本海洋人間学会査読委員会

委員長／藤本浩一

査読委員／中塚健太郎、中村夏実、瀧真輝、村田信

海洋人間学雑誌 第7巻第1号

2018年9月 発行

発行者 神田一郎

発行所 日本海洋人間学会

〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7 東京海洋大学内

郵便振替 加入者名 日本海洋人間学会

口座番号 00150-6-429943

TEL/FAX : 03-5463-0638 (藤本研)

URL : <http://www.jsmta.jp/>

E-mail : jsmta@jsmta.jp

第6回日本海洋人間学会総会議事録

開催日時及び場所

日時 2017年9月17日(日) 13:00～13:50
場所 国立大学法人 東京海洋大学 白鷹館 大講義室

神田会長挨拶：今大会で第6回を迎え、会員の皆さまのご協力の下、地道な活動を継続できたことが礎となっており、改めて感謝申し上げたい。また、本日は台風の中、学会および総会にご参加頂いた会員の皆さまに感謝申し上げるとともに、台風関連の業務が生じ、参加できなかった会員もいらっしまったこととも報告したい。総会にご参加の皆さまには活発な論議をお願いするものである。

議長および議事録署名人の選出：議長は千足総務委員長として、満場一致で選任された。議事録署名人は阿保純一代議員及び蓬郷尚代代議員として、満場一致で選任された。

議事に先立ち、総会構成員（役員17名及び代議員33名）50名のうち、役員と代議員の出席者が22名、委任状提出者が19名であり、定款第34条の1項にある総会成立定足数（過半数以上）を満たしたことが、藤本事務局長より報告された。

【審議事項】

- ・1号議案 2016年度事業報告
千足総務委員長により総会資料に基づいて説明がなされ、審議の結果、承認された。
- ・2号議案 2016年度決算報告
 - 1) 佐々木財務委員長より総会資料に基づいて説明がなされた。
 - 2) 菊地監事より監査結果として、定款・法令に照らし妥当であることの報告がなされた。上記1)、2)について審議の結果、承認された。

- ・3号議案 2018年度事業案
千足総務委員長より総会資料に基づいて説明がなされ、審議の結果、承認された。

事業案の補足 ①委員会活動の活発化を図る目的の為、委員会付け予算の配分を検討中 ②2018年5月～7月に役員改選選挙を実施する ③投稿料無料化を検討中 ④次年度からの学会大会において学生会員が筆頭者の場合は大会参加費を無料とする（本件は報告の後、承認された） ⑤10周年記念大会特別委員会の設置を検討中 ⑥会費の切り下げを検討中 以上6件の報告がなされた。フロアより10周年記念大会企画に対して夢のある魅力的なものをお願いしたいとの発言があり、理事会より、特別委員会設置後に本格的な企画立案がなされるものの、現状、理事会では特別講演や功労賞の授与などを検討しているとの返答がなされた。

- ・4号議案 2016年度改正予算案および2017年度予算案

佐々木財務委員長より総会資料に基づいて説明がなされ、審議の結果、承認された。口頭で修正が加えられた事項は、後日メールにて配布する（2017年9月18日付けメール、第6回総会資料4号議案訂正版.pdfにて配布済み）。

- ・5号議案 細則条番号の変更

藤本事務局長より総会資料に基づいて説明がなされ、審議の結果、承認された。

- ・6号議案 その他

神田会長より、3号議案の補足として会費切り下げを検討している旨の報告があったが、10周年記念事業等もあることから、当面の間、様子を見ながら検討する意向が示された。

以上

議事録作成人 藤本浩一（事務局長）

本議事録の記載内容が実際の議事進行並びに承認、可決事項と相違が無いことを確認した。

2018年3月31日

議事録署名人 代議員

蓬郷尚代

代議員 阿保純一



第6回 日本海洋人間学会役員会議事録

開催日時：2017年9月16日（土） 11:00～12:00

開催場所：国立大学法人 東京海洋大学 5号館1階実験室

出席理事：海野義明（委任）、神田一郎、國枝佳明（委任）、熊田公信（委任）、久門明人、佐々木剛、
佐野裕司、武田誠一、千足耕一、中村夏実（委任）、藤本浩一、保坂由紀（委任）、
松本秀夫、柳 敏晴、矢野吉治

出席監事：菊地俊紀、寺澤寿一（委任）

事務局長：藤本浩一（理事と兼任）

審議に先立ち、藤本事務局長より理事の出席者数および委任状提出数が、役員会成立の定足数（現理事数の3分の2以上）を満たしていることが報告された。

神田会長より挨拶の後、今大会における理事の役割分担が以下のように確認された。

- ・学会開会宣言&開会の辞（佐野常務理事&神田会長）、学会閉会の辞（武田理事）。
- ・懇親会 進行（千足理事、事務局）、開会挨拶&乾杯（神田会長・佐野常務理事）、懇親会閉会挨拶（武田理事）。
- ・総会 開会の辞（佐野常務理事）、会長挨拶（神田会長）、議長の選出（佐野常務理事：事務局案千足総務委員長）、議事録署名人の選出（議長：事務局案阿保代議員、蓬郷代議員）、閉会の辞（佐野常務理事）、各賞授与式の司会（矢野理事）、賞状授与（神田会長）。

【審議事項】

1. 総会について

定数確認と総会資料の訂正については藤本事務局長より行い、総会資料の説明については以下の分担とすることが確認された。

- ・1号議案：千足総務委員長が説明を行うことが確認された。また、委員会活動等の内容に関する確認が行われた。
- ・2号議案：佐々木財務委員長より説明を行うことが確認された。監査報告は菊地監事より行うことが確認された。
- ・3号議案：千足総務委員長が説明を行うことが確認された。2018年度学会大会（第7回大会）は2018年9月22、23日、武田理事を実行委員長として東京海洋大学にて行うことが確認された。千足総務委員長より今後の方針に関する報告が行われることが確認された。
- ・4号議案：佐々木財務委員長より説明を行うことが確認された。
- ・5号議案：藤本事務局長より説明を行うことが確認された。
- ・6号議案：本件の他にフロアからの発議があった場合は、対応することが確認された。
また、千足総務委員長より今後の方針に関する報告が行われることが確認された。

2. その他

- ・10周年記念大会特別委員会の設置、各委員会経費、会費の切り下げに関する論議がなされ、この3件は継続審議となった。本件は総会にて、その旨の報告を行うことが確認された。
- ・学生会員発表筆頭者は大会参加費を無料とする案が提示され、理事会にて可決された。本件は総会にて報告し、承認を受けることが確認された。
- ・本議事録に関する理事の署名人は、武田理事、佐々木理事とすることが承認された。

以上

議事録作成人 藤本浩一（事務局長）

本議事録の記載内容が実際の議事進行並びに承認、確認事項等と相違がないことを確認した。

2018年3月3日

議事録署名人 議長 神田一郎

議事録署名人 理事 武田誠一

議事録署名人 理事 佐々木剛



Vol. 7 No. 1

September 2018

Japanese Journal of Maritime Activity

Japan Society for Maritime Activity (JSMTA)